

かゝらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第151号

令和4年9月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

S16/9 刊行 府立四條畷中「小楠公読本」

楠公精神顕彰に、全校生徒に朗読・精読求め

＝ 太平記鈔・日本外史鈔・正行かかわり漢詩・碑文ほか網羅 ＝

● 資料性に富んだ読本 ●

昭和16年9月、大阪府立四條畷中学校は「小楠公読本」を発行した。その小楠公読本を、私たちの会員、内藤雅義さんから提供を受けたが、正行を学ぶものにとって、これほど素晴らしい充実した内容の書籍（小冊子）はほかに見当たらない。

当時の校長、塘壽先生の序文に始まり、正行奮戦図と正成書状の口絵が入り、安岡正篤の楠公頌と続く。そして、正行かかわりの事績中心に太平記鈔があり、日本外史鈔が載る。

更に、附録①は「四條畷の戦」、附録②は「景楠聖地」（正四位下檢非違使兼河内の守楠公碑碑文含む）、附録③は「楠公頌」（漢詩ほか・楠公の歌「桜井の訣別」「四條畷」含む）と、関係資料が網羅されている。

昭和10年代の頃の四條畷中学校の生徒は、この小楠公読本を朗読愛読し、精読の上、楠公精神の真髓を学べ、と教えられていることが分かる。

この小冊子一冊で、四條畷の戦いぶりや楠公精神が理解でき

る資料性に富んだ読本で、かつて府立四條畷中学校を巣立っていった生徒諸氏は、正行の事をしっかり学び、相

当程度熟知していたことが分かる。

以下、「序」と「楠公頌」の全文を紹介する。

序

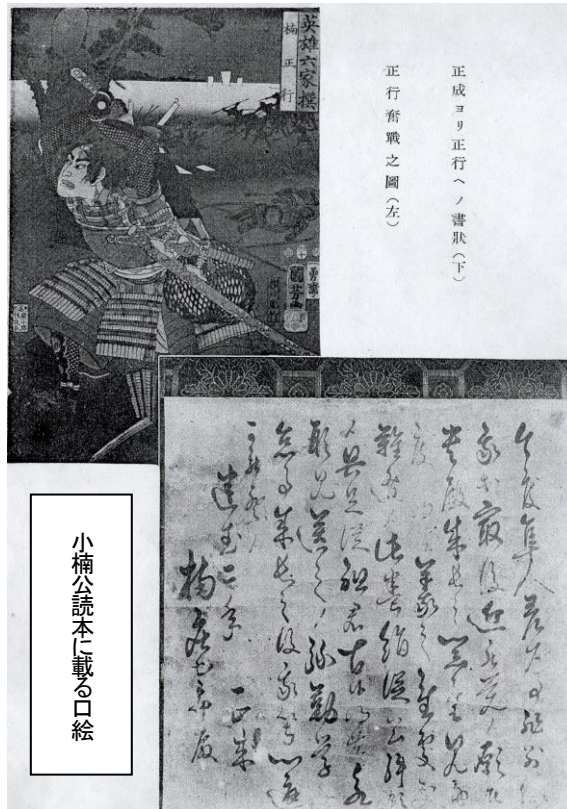
それ史を読むは、古聖賢の精神に触れ、治乱興亡の跡を顧み、国体の本義を知る所以にして、国民生活上必須の事なり。曩に本校に於いて日本外史楠史篇を選びて本校全生

徒必読の書となせしも、又此処に見る所ありしなり。四條畷神社例祭慈訓祭はもとより日常諷誦の間自ら楠公父子の正義に感じ精忠に化し本校訓育に裨益する所大なりき。然るに楠公の顕勲は垂れて漢籍に存するのみならず又国文古典にも有之、即ち此処に太平記より楠氏に関する篇章を節録し曩の日本外史楠氏篇と合纂して小楠公読本と名付け全校生の愛誦に供する事とせり、楠氏の遺徳を顕彰するに好個の資料たらん。

諸子それ言々句々朗読愛読の間楠氏に親炙し以て時艱を克服すべき楠公精神の真髓を体得せば諸氏の生涯に於いて取得するところ多からん。

なほ巻頭に本校先輩安岡正篤

先生の「楠公頌」をいただき、附録として楠氏地元研究家たる本校教諭大久保慶眞氏執筆の四條畷戦記並びにその菟



小楠公読本に載る口絵

集にかかる小楠公に因める文書を掲載せり。これ凡て本校に学ぶものの心得べき事なり。又精読を望む。併せ録して両先生の厚志に謝する所以なり。

昭和 16 年 8 月

大阪府立四條畷中学校長 塘 壽

(略解)

歴史を学ぶのは、古来、抜きんでた賢者の精神に触れ、国家の争乱や安寧の歴史を検証し、国としてあるべき姿を知るためであって、国民誰しもが学ぶ必要がある。以前、本校では日本外史の楠史篇を全校生に必読すべしとしたのもこの所以である。四條畷神社の例祭や慈訓祭への出席はもとより、日常生活において楠史篇を暗誦し、しっかりと楠公親子の正義を理解し、その功績を知ること、本校の教育にとって極めて有益な事である。そして、楠公の功績は漢詩によるのみならず、国文の古典にもあり、よって太平記の中の楠氏に関わる件をまとめ、日本外史の楠史篇と合わせて「小楠公読本」として刊行し、全校生徒に愛読書として提供することで、楠氏の事績を顕彰するための書籍とする。

生徒諸君は、ひとことひとこと、一区切り一区切り、かみしめながら朗読し、愛読することで、楠公精神に少しでも近づき、感化を受け、その結果、時の難儀に遭遇してもこれを克服すべき楠公精神の真髓に触れることができれば、生徒諸君の長い人生において大いに役に立つであろう。

なお、この小冊子は、巻頭で本校先輩の安岡正篤先生の楠公頌を寄稿いただき、附録として楠史研究家であり本校の教諭である大久保慶眞先生が執筆された四條畷戦記とその関連資料から小楠公にゆかりの文書を掲載したものである。この小楠公読本は、本校で学ぶすべての生徒が心得ることとしてしっかり学んでいただきたい。そして、精読を望むものである。最後に、両先生の厚志に深謝し、お礼を申し上げる。

楠公頌

安岡正篤

人間最も憾むべきを酔生夢死となす。誠に感激なくして何の人生ぞや。是の故に己を知る者の為に死するは士の常なり。英雄と共に死なんと欲するは民の情なり。海ゆかば水浸く屍山ゆかば草蒸す屍。大君の邊にこそ死なめといふは日本臣民の誓なり。然れども亦感激は得がたく人生は惑ひ多し。世間茫茫夢裡に過ぎ易く一たび大事難事に臨んでは紛然として拳措を失す。

嗚呼楠公。元弘の昔海内鼎沸民塗炭に墜つる時勅に應じて身を致し天下を敵として恐れず。一時の成敗に驚かず。毅然万軍に抗して遂に聖運を開く。何たる忠勇偉勲ぞや。畏れ

多くも、天皇より大義早速の功偏に汝が忠戦に在りと仰せありける身を以てさらに誇競の色も無く功を推して人に下る。何たる禮讓謙虚ぞや。建武の末天下復び運拙くて計容れられざるや従容死に就き七生賊を滅ぼさんことを誓ひ一門を挙げて王事に竭す。何たる精誠義烈ぞや。

天地の正気粹然として公を現ず。公の英靈儼乎として国家を鎮む。公に感じて鬼神も泣き公を聞いて懦夫も起つ。嗚呼楠公。

(略解)

人間、何もせず空しく一生を送ることがあつてはならない。感激のない人生を送って、何になる。楠公は、一田舎の豪族の身にありながら、後醍醐天皇のお召しにあずかり、意見を求められたときの感激はどんなに大きかったことか。だから、この楠公と共に、赤坂、千早、湊川の戦に従った配下の武将も実に偉いといえる。海でゆくなら海水に浸たる屍となろう、山野をゆくなら草の映える屍となろう、天皇のおそばで死ぬのだから決して後悔しない、と謳われるが、これは日本人の誓いである。しかし現実的には感激を得ることは難しく、人生に迷いは多いものである。世間に生きる人は、当てもなく生き、夢心地のままに時が過ぎ易く、ひとたび艱難辛苦に遭遇したとき、心が乱れてしまい、毅然とした立ち居振る舞いできないものである。

素晴らしい人生かな、楠公。元弘の時代、天下が大いに乱れ、民は礼儀を厚くして人にへりくだることを忘れていた時、楠公は後醍醐天皇との邂逅に感激し、時の政権に向かって立ち上がったのである。赤坂で一度は負けても、1年後、再び千早に立ち上がり、寡兵ながら大軍と戦い、終に建武新政を切り拓いたのである。なんという忠義であり、勇気であり、武功か。兵庫では、「大義、早速の功、偏に汝が忠戦にあり」と後醍醐天皇が仰せられたのに対し、討ち死にされた菊池武時殿こそ武功一番の功労者と推すのである。是こそ、己を空しくして生きる武士道の極みというものである。建武の新政が存亡の危機にあつたとき、献策をするも受け入れられず、天皇の命を受け入れ、湊川に下り、「七たび生き返っても賊を討つ」と言い、一族郎党と共に討ち死にし、天皇に忠をつくしたのである。なんとした精忠、誠の精神、忠義・正義の心が強い精神の持ち主か。

大地の正気は混じりけなく正成公の姿を照らしている。正成公の英霊は、うやうやしく国家の安寧を見守っている。正成公の生きざまに天地創造の神も感涙し、正成公の勇氣ある武功を知って臆病者も奮起するのである。

ああ、なんと素晴らしい人生かな、楠公。

(2つの略解は扇谷私案)

(文責：四條畷楠正行の会代表 扇谷昭)